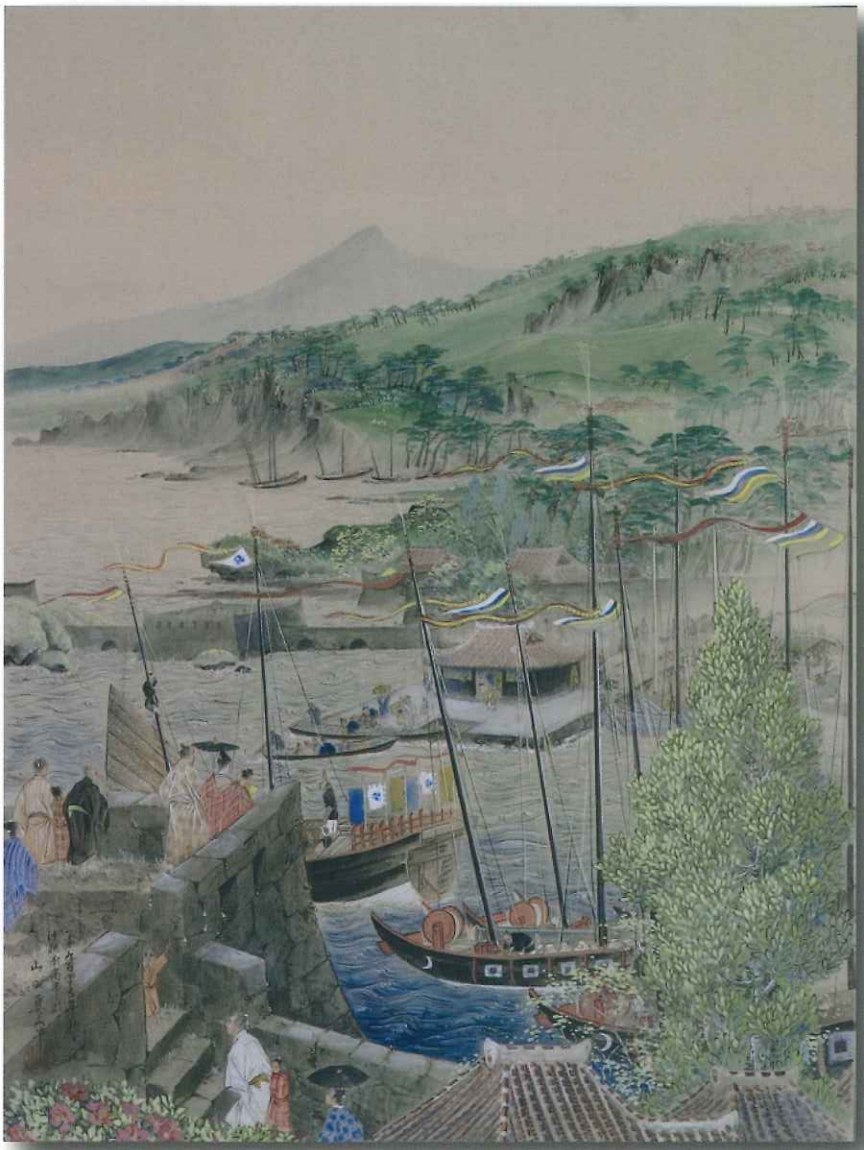
平和で豊かな沖縄県を目指す情報誌

沖縄協会だより

無料
ご自由にお持ち帰り下さい

2022.7
No.24



山田真山 作

琉球王国時代那覇港の風景

日本画 60×40×2 ㎝

沖縄平和祈念堂
所蔵絵画紹介

山田真山

本名渡嘉敷兼慎。若くして才能を認められ上京、高村光雲の弟子・山田泰雲に師事。後に姓を渡嘉敷から山田に改める。1906年に東京美術学校(現東京芸術大学)入学、彫刻と日本画を専攻。卒業後、清国北京芸徒学堂に講師として赴任。帰国後、日本画を小堀鞆音、彫刻を高村光雲、工芸を峰岸宝哉に師事。中央美術界の第一線で活躍し、日本芸術界に大きな足跡を残す。その代表作は、明治神宮聖徳記念絵画館に収蔵されている。40年沖縄に帰郷、沖縄戦を体験し長男と三男を失う。二度と再び戦争を繰り返してはならないという平和への悲願を込めて、57年72歳の時に沖縄平和祈念像の制作を発表、全県民が賛同し、とりわけ県内の小・中・高校生も拠金して応援した。以来18年の歳月をかけ75年(90歳)に平和祈念像の原型を完成させる。77年1月29日没。78年平和祈念像完成(沖縄平和祈念堂開堂)。※4ページに関連記事

沖縄協会は、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会(昭和31年～47年5月)の後を受けて、昭和47年9月20日に設置された内閣府所管の公益法人です。新たに設立した財団法人沖縄協会は、南方同胞援護会の実績と経験を活用して、沖縄の振興施策に積極的に協力し、平和で豊かな沖縄県の建設に寄与してまいりました。平成23年(2011)4月1日、沖縄協会は内閣総理大臣より公益財団法人として認定を受けて「公益財団法人沖縄協会」として新たな一歩を踏み出しました。これからも、沖縄県の健全な発展と幸福な社会形成に役立つ事業を行いながら、沖縄平和祈念堂を管理運営することで、平和で豊かな沖縄県の建設に貢献していきます。

公益財団法人 沖縄協会

会長就任のご挨拶

公益財団法人沖縄協会会長　清水 治

この度、6月1日より沖縄協会会長に就任いたしました。故野村一成前会長をはじめ各界を代表する気宇の大きな先輩方が務めてこられたことを顧みると、身の引き締まる思いです。微力ながら円滑な事業運営に精励してまいる所存です。

私の沖縄とのご縁は、2007年1月から2013年6月にかけて、内閣府で沖縄振興政策に携わったことに始まります。当時は、10年毎に見直されてきた沖縄振興特別措置法に基づく次期法制、沖縄振興計画のあり方を検討する時期に当り、沖縄県の皆さんと意見交換をし、法律改正に取り組んだことが印象に残っています。また、沖縄各地のインフラ整備、不発弾処理などの戦後処理問題や沖縄科学技術大学院大学創設に向けた企画・法律制定も担当しました。この間、折に触れ摩文仁の地を訪れ、沖縄平和祈念堂にて、祈りを捧げました。

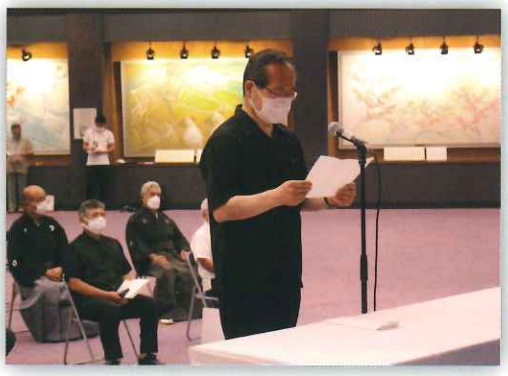
今年は沖縄復帰50周年を迎え、当協会も設立50年になります。このような節目の年に、会長就任に当り、協会の歴史を紐解きたいとの思いを抱きました。現在、早稲田大学大学院で教鞭をとることもあり、初代沖縄協会会長を務め、元早稲田大学総長の大濱信泉氏の伝記を拝読しました(注)。大濱先生が、南方同胞援護会会長の時代から政府へ沖縄復帰に関する提言をされるなど復帰に向けて多大な尽力・貢献をされたことは周知のとおりです。先生が「その生涯において全精力を投入した悲願ともいうべき大きな事業が、いまひとつある。沖縄平和祈念堂の建設がそれである。」と記されていることに改めて感銘を受けました。大濱先生は、沖縄平和祈念像の制作に専心された山田真山先生に共鳴して、復帰前より祈念像事業の支援に取り組まれ、当協会会長就任後も、様々な困難を克服されて、沖縄平和祈念堂建設の道筋をつけられました。残念なことに、病を得て1976年2月の地鎮祭への出席はかなわず、9日後に逝去されています。

この伝記の後付けを見ると、大濱信泉伝記刊行委員会を発行者として刊行され、同委員会は沖縄協会内に置かれ、その委員長は当協会第二代会長の茅誠司先生が務めています。また、伝記編集員会も当協会内に置かれ、編集員長は長く当協会の専務理事を務められた吉田嗣延氏でした。最晩年に沖縄平和祈念堂の建設に尽力された大濱先生の功績を偲ばせます。

さて、当協会の目的として、「平和で豊かな沖縄県の建設に寄与すること」が掲げられ、そのために、「戦没者を追悼し恒久の平和を念願して建設された沖縄平和祈念堂の管理運営に関する事業」と、「沖縄県の健全な発展及び沖縄県の幸福な社会の形成に資する事業」を行うことを掲げております(定款第3条)。今後とも、沖縄の平和と発展という二本柱を車の両輪として、事業の着実な運営を図ってまいりたいと思います。具体的には、平和祈念堂事業として、沖縄全戦没者追悼式前夜祭、こどもまつり、摩文仁・火と鐘のまつりなどを進めてまいります。また、発展に関する事業として、沖縄研究奨励賞や働きながら学ぶ沖縄青少年支援等の助成事業、講演会をはじめ広報事業にも取り組んでまいります。ここ数年、コロナ禍により事業の制約を受けてきましたが、感染症克服状況も見ながら、事業規模の回復にも配意したいと思います。

引き続き沖縄県民の皆さまや広く日本の皆さまにおかれては、当協会に対しまして、これまで通りのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

(注)大濱信泉伝記刊行委員会・発行、大濱信泉伝記編集員会・編集　「大濱信泉」(昭和53年、文唱堂)



沖縄全戦没者追悼式前夜祭(6月22日)の様子

トピックス

★沖縄平和祈念像「浄め」

6月9日、当協会は恒例の沖縄平和祈念像「浄め」を行った。この浄めは6月22日に行われる「沖縄全戦没者追悼式前夜祭」を迎えるにあたり行われるもの。昨年に引き続きコロナ禍のため、平和祈念像の制作に従事した糸数政次さん(漆芸家・当協会理事)と当協会職員の8名で実施した。戦没者への慰霊の祈りと世界の恒久平和、一日でも早くコロナ禍の終息を願い、平和祈念像の埃を払い浄めた。

★令和4年 沖縄全戦没者追悼式前夜祭

6月22日、当協会は令和4年沖縄全戦没者追悼式前夜祭を沖縄平和祈念堂で開催した。この行事は、慰霊の日と沖縄県が主催する沖縄全戦没者追悼式をより意義あらしめるため、沖縄県、(一財)沖縄県遺族連合会、(公財)沖縄県平和祈念財団の共催を得て毎年開催している。今回は、現在も続くコロナ禍を考慮し、ご遺族をはじめ一般各位のご参列を見合わせていただき、規模を縮小して式典と琉球古典音楽の献奏のみ実施した。

式典では、来賓・琉球古典音楽献奏者代表各位が参列するなか、「鎮魂の火」の献火、「平和の鐘」の献鐘を合図に黙祷を捧げた。

次に、清水治会長より「私達は、現在の生活が幾多の尊い犠牲の上に築かれたことを決して忘れず、戦争への反省と世界平和への決意を新たにし、戦没者追悼の象徴である沖縄平和祈念堂から全世界の人々に、恒久平和の実現を訴え続けていくことを誓う」と鎮魂(しづたま)のことばを述べた。

最後に、前夜祭の主題を表す琉歌三首を歌唱する琉球古典音楽の合同献奏が、琉球古典音楽湛水流保存会・琉球古典音楽安冨祖流絃聲会・琉球古典音楽野村流音楽協会・琉球古典音楽野村流保存会・琉球古典音楽野村流伝統音楽協会と琉球箏曲興陽会・琉球箏曲保存会において最高の技能を保持される代表の方がたによって3年ぶりに行われた。

★岸田文雄内閣総理大臣来堂

6月23日、岸田文雄内閣総理大臣が沖縄平和祈念堂を訪れた。岸田総理は、沖縄県主催「令和4年沖縄全戦没者追悼式」に参列のため来沖し、国立沖縄戦没者墓苑・島守の塔の参拝に続いて沖縄平和祈念堂に到着された。

平和祈念堂では岸田総理を清水治当協会会長と上原良幸副会長、新垣昌頼専務理事が出迎えた。

堂内では、岸田総理は沖縄平和祈念像参拝のあと新垣専務理事より祈念像原型制作者の山田真山画伯や堂内壁面を飾る西村計雄画伯が制作した20点連作絵画「戦争と平和」について説明を受けられ、熱心に耳を傾けた。

堂内で山田真山画伯の説明を受ける岸田総理(左)

★沖縄慰霊の日「平和の魂ーオオゴマダラ」の放蝶

6月23日、令和4年沖縄全戦没者追悼式前夜祭関連行事の「平和の魂ーオオゴマダラ」の放蝶を実施した。蝶のことをギリシャ語でプシュケ(「魂」の意)ということから、当協会が管理する清ら蝶園で平和の「魂」としてオオゴマダラを育て、戦没者を追悼し世界平和の実現を祈る沖縄平和祈念像の使者として、例年、慰霊の日に摩文仁の空へ放蝶を実施している。放蝶に先立ち、正午にあわせて平和の鐘の献鐘、戦没者慰霊と恒久平和を祈る黙祷につづき、参拝に訪れたガールスカウト第5団のこども達や関係者、当協会役職員によってオオゴマダラ約20匹を放蝶した。

放蝶の様子(6月23日・沖縄平和祈念堂正面)

★沖縄平和祈念堂 改修工事に伴うご寄付のお願い

開堂から44年を迎える沖縄平和祈念堂では、現在、経年劣化による改修工事を頻繁に実施しております。今後、さらに工事の必要が考えられますので、多くの皆様に諸経費に対するご寄付を賜りますようお願い申し上げます。ご連絡いただきましたら、ゆうちょ銀行専用振込票を送付させていただきます。

公益財団法人 沖縄協会
【電話番号:03-6231-1433】
【FAX:03-6231-1436】

沖縄平和祈念堂では、沖縄県が作成した「新型コロナ感染症感染防止対策チェックシート」を実施し、「感染防止徹底対策宣言ステッカー」を取得しています。

沖縄協会だより
2022.7 No.24

トピックス

★「第7回ぬちぬぐすーじさびらコンサートin摩文仁」

6月18日、平和の礎に刻銘された24万余の人々の追悼と恒久平和の祈りを世界に発信する「第7回ぬちぬぐすーじさびらコンサートin摩文仁」(主催・レクイエムコンサート実行委員会、共催・沖縄県立芸術大学、沖縄協会)が沖縄平和祈念堂で開催され、約150人余りの聴衆が訪れた。これまで、現在も続くコロナ禍のため中止を余儀なくされた「昨年の第5回、昨年の第6回は事前に録画したコンサートのオンライン配信を行ったが、今回は3年ぶりに生演奏による開催となった。このコンサートは、沖縄戦後、生き残った我々が元気を出して頑張ろうと励まし、勇気づけ、沖縄の復興に尽力した小那覇舞天(小那覇全孝)氏の言葉「ぬちぬぐすーじさびら(命のお祝いをしましょう)」をタイトルに、あらためて戦没者に深く思いをいたし、戦争、基地のない平和な沖縄に向けて努力していく決意を込めて開かれている。演目は、モーツァルトの「レクイエム」と「アヴェ・ヴェルム・コルプス」が演奏され、厳にかに奏でる県立芸大オーケストラ、堂内に響き渡る声楽家と沖縄レクイエム合唱団の約70人の演奏に聴衆は深く魅了され、感動とともに惜しみない拍手を送った。

協会関係事業他 募集案内など

★第30回金城芳子基金 助成対象者決定

4月24日、当協会が主催する30回(令和4年度)金城芳子基金運営委員会が開催され、応募があった6件の中から糸数温子氏(一橋大学大学院博士課程)の「沖縄における子どもの貧困事業対策」を助成対象に決定した。6月14日、県庁記者クラブで贈呈式が行われ、助成金30万円が贈られた。

★第44回(令和4年度) 沖縄研究奨励賞推薦応募案内

沖縄研究奨励賞は、沖縄を対象とした将来性豊かな優れた研究(自然科学・人文科学・社会科学)を行なっている新進研究者(又はグループ)の中から受賞者3名を選考し、奨励賞として本賞並びに副賞の研究助成金50万円を贈り、表彰するものです。応募期間は7月15日～9月30日(当日消印有効)

※表紙絵・山田真山作「琉球王国時代那覇港の風景」寄贈の経緯

・寄贈者

マリウス・バーサス・ジャンセン博士(1922～2000)
米国プリンストン大学名誉教授・日本国文化功労者

・寄贈の経緯

この作品は、45年山田画伯が終戦直後に名護市瀬嵩の捕虜収容所で友達になったジャンセン博士に贈った日本画。洋紙に岩絵の具を用いて琉球王国時代の那覇港に浮かぶ進貢船や見送りの人々の模様が生き生きと色鮮やかに描かれている。ジャンセン博士が89年に再び沖縄を訪れた時、山田画伯が心血を注いで制作した平和祈念像が安置された沖縄平和祈念堂のことを知り、この絵を沖縄に返したいと思い立ち、99年夫人のジーン氏とともに平和祈念堂を訪れ、寄贈奉納された。

沖縄平和祈念堂美術館

沖縄出身画家紹介 13

奏(そう)　与儀達治 作

与儀達治　昭和6年 沖縄県生

【画歴】
多摩美術大学卒。一陽会展入選、同展特待賞、同展会友賞、沖縄タイムス主催芸術選賞大賞。一陽会会員、沖展会員、沖縄県美術家協会会長、沖縄県立芸術大学教授、県展実行委員。

【制作意図】
ここ沖縄の、南部を通るたび、去る大戦の地獄の様相に想いが走る。この作品は、むごたらしく散った人々への鎮魂のつもりでいる。生き残りとして。

額サイズ:
縦×横×厚【181×150×9 ㎝】

● 2022年7月発行
● 発行／公益財団法人 沖縄協会(沖縄平和祈念堂)　〒901-0333 沖縄県糸満市摩文仁448-2　TEL.098(997)3011　FAX.098(997)2678
(HP) http://www.okinawakyoukai.jp